

随想

Cantare ! ことばは宿る

飯島 千雍子 *

“Cantare! The word dwells in us”

IJIMA Chigako

“Cantare! Sing!” This was the favorite word of the great Italian opera conductor Arturo Toscanini in orchestra rehearsals. What was Toscanini asking for? This is related to the question: When did humans begin to sing? Why do humans sing? As a vocalist and as a teacher, I had always asked myself this question, because I could not teach what I wanted to teach. Of course, I have had many wonderful and happy experiences with singers. They sing with their own heart, spirit, will and thought. Singing is an expression of the depths of the human mind.

What do I want to teach? Singing. Singing comes from within a person. We can sing with a person, but we cannot teach a person to sing. Singing is also telling a story. Telling a story is a part of our humanity. We have a story within us, and we live this story.

We sing words, and we think in words. We also have problems with language, especially when we are dealing with Japanese. I had the valuable experience of receiving Sprecherziehung (speech education) dealing with the German language. I would like to apply what I have learned to the Japanese language.

キーワード : Cantare ! 「ことばは宿る、談話術教育 Sprecherziehung, 歌唱について」

Keywords: Cantare! “The word dwells” : About Sprecherziehung (speech education), singing

1. Cantare !

「もし、誰かがハンガリーの音楽教育の本質を一言で言おうとすれば、それは、歌う—というひとことにつきる。トスカニーニが、練習中にもっとも多く口にしたことばは、カンターレ！（うたえ！）であった。千の色合いと、意味をもって。」¹

ハンガリーの作曲家コダーイが、『コダーイ・ゾルターンの教育思想と実践』²の序に記したことばである。民族音楽学者でもあるコダーイ（Kodály Zoltán 1882-1967）は、僚友の作曲家バルトーク・ベラ（Bartók Béla Viktor János 1881-1945）とともにハンガリーの村々を回り、民謡を収集・採録、ハンガリーの民謡集を出版する。教育にも深い関心を持ち、ハンガリーの子どもの音楽教育をハンガリーの民謡、わらべうたを歌うことをもって始めることとし、子どもを直接に指導する保母の養成教育にも力を注いだ。彼は、子どもの未来を預かる保母に彼らの仕事の重要性和意味を丁寧に説き明かす。「コダーイ・システムは現在のハンガリーにおいても、音楽教育の中心である。」³

『ハンガリー民謡大観』第1巻「遊戯うた」（1951年）に記されたコダーイの序文によれば²、最初のハンガリーの遊戯うたを収集・出版したのはキシュ・アーロン（1845～1908年）であった（1891年）。キシュは、「ハンガリーの子ども自身の魂の形と、その提供する養分に注目した」。1883年、全国教員大会では、キシュの提案によって、1) 遊戯とそれについてハンガリーの子どものうたは一般教育に取り入れられること、子どものうたのハンガリーの性格は尊重されるべきこと、2) 子どもたちの遊戯とそのうたは、ハンガリーのすべての地方にわたって収集されなければならない、の決議が採択された⁴。

ハンガリー人はよく歌う。かつてドイツやオーストリアの講習会に来ていた東欧の若い歌い手たちはよく歌う人たちであった。ハンガ

リー、ルーマニア、ポーランド、チェコ。中でもハンガリーの学生は若くして歌人であった。上手く、魅力があり、大人の歌を歌った。心に響く歌を歌った。彼らの声と歌は素直でのびのびと響く、深く熱く、喜び・歓び、悲しみ・哀しみ、苦しみを真直ぐに歌う。心に深く穏やかにしみわたる。マジヤール人の歌である⁵。歌う民族と言うことが許されるだろうか。どの民族も民族の歌を持っているだろうか？トスカニーニの欲求する cantare は、この cantare だと考える。「歌うたう」ことを課題としてきて、「歌う」意味を問い続け、ずうっと今も、人は、歌い、うたう歌の詞と詩のことばで耕されるのだと考えている。

前述したコダーイの著書には、論文のほか、保育者大会等での講演記録も掲載されている。コダーイが保母たちに保母の仕事の重大さを繰り返し説いたのは、歌うことが、ことばを食すると同じように人の成長に大きな影響力を持っていると確信しているからである。コダーイは、当時のハンガリーの音楽教育の状況を見て、「うたわれているものは、決まって、芸術の玄関口より、はるか手前のものであり、そのうたい方は有能な自然主義以下の水準である。」「このような状況のもとで育った子どもは、死ぬまでの間に、芸術としての音楽に接することはまずない」⁶と、危機感をつのらせている。ハンガリー語の民謡をうたうことがハンガリーの子どもにとって音楽の食育と確信すると、コダーイは、採録した民謡を実践に提供、自ら労し、保育者を協働者として育てることに力を注いだ。

短期大学保育科に採用が決まって学科主任に挨拶に伺ったとき言われたことは、「歌を教えてください」の一言であった。聖歌隊の指導も任された。歌、音楽の指導は、自ら歌うこととは別の、もう一つ新たな専門領域でもある。歌の面白さ、一人ひとりの学生が音楽の喜びを味わう幸いな経験をできることを願って、様々なことを試みた。以前、大先輩のリトミックの教

授が、「1年かけて歩くことを教えるのだ」というようなことを仰っていた。なるほどと思う。歌うことは歓びである。うたの歌たるをどう表し、うたってもらえるか、そのことを求め、考え、自らもうたうことから離れられない。然し、歌うことは祝福を受ける業である。

最近、プッチーニの『ラ・ボエーム』を機上で視聴し、歌いたくなった。聴きながら身体の中で歌い、歌いながら聴いた。歌うということはつまり聴き歌う、ことばを歌う。ことばを感じ、認識し、考え、想い、思いをうたう。

いつ、歌が自分の中に入って来たのか、生まれたのかわからない。人はいつ、なぜ歌い始めるのか。旧約聖書が記している、「セトにも男の子が生まれた。彼はその子をエノシュと名付けた。主の御名を呼び始めたのは、この時代のことである。」(創世記4章26節) 神の御名を呼ぶことを始めたときから歌があったと考える。

呼ぶことと歌うことの繋がりについて考える。歌うことに欠けてはならない内側から呼ぶ声、ことばが感じられない歌、聞こえてこない歌、あるいはことばが空回りしている歌、声のなかにことばがない歌が多くなった。

歌は口をついて生まれる。歌は人の中から生まれる。歌はことばを歌う。ことばが歌を生む。ことばを歌う。W-J・オングの言う「話されることばは、音[音声]という物理的な状態においては、人間の内部から生じ、[それゆえに]人間どうしをたがいに意識を持った内部、つまり人格 person として現れさせる。」⁷は、同様に、歌についても考えることができると思う。

2. ことばは宿る

・「キリストの言葉があなたがたの内に豊かに宿るようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、論し合い、詩編と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい。」

コロサイの信徒への手紙/3章16節 新共同訳

・「キリストの言葉を、あなたがたのうちに豊

かに宿らせなさい。そして、知恵をつくして互に教えまた訓戒し、詩とさんびと霊の歌によって、感謝して心から神をほめたたえなさい。」

コロサイ人への手紙/3章16節口語訳

・キリスト(メシヤ)の(語られた)ことばを[あなたがたの心情と知性の中に]宿らせ《あなたがたのうちに[全く]豊かに住ませ》なさい。 詳訳聖書

注解書によれば、「キリストの言葉は、それが信者の思いを支配するほど深く生活の中に根をおろしていなければならない。」とある。別の資料によれば、「文字どおりには、家の中にいる、内住する、居住する。主の言葉は、わたしたちの内側に、十分な地位を持たなければなりません。それは、言葉がキリストの豊富を、わたしたちの内側へと働き、供給し込むためです」。つまり、ことばが宿るということは、宿ったことばがその人の思いを支配するほど深く根をおろすということである。

松居直氏は、『絵本・ことばのよろこび』(日本基督教団出版局1995)で、詩人、俵万智のエピソードを紹介し、幼い子どもが絵本のことばを食することについて確信をもって述べている。「ことばは知的なものであるよりも、本来生理的なものです。音声をとまなげて語られることばは特にそうです。乳幼児にとっては、ことばは頭で理解するものでなく、全身全霊で感得するものです。」「わたしは『子どもはことばを覚えるのではなく、食べるのだ』と悟りました。……おいしいことばを心ゆくまでたっぷり食べ、心の底から喜びを感じた子どもは、いつか無意識のうちに、そのことばを紡ぎだします。」と⁸。

2.1 ことばに出会う。

宮沢賢治の『セロ弾きのゴーシュ』を読んだとき、「トロメライ、ロマチック シューマン作曲。」とすました猫のことばに、ちょっと感ず

るものがあったが、くわっこう鳥には、迫られた。ことばの力である。

「音楽を教わりたいのです。」くわっこう鳥は済まして云ひました。ゴーシュは笑って「音楽だと。おまへの歌は、かくこう、かくこうといふだけじゃあないか。」……「ところがそれがひどいんです。たとえばかくこうとかうなくのとかうこうとかうなくのとは聞いていてもよほどちがふでせう。」「ちがはないね。」「ではあなたにはわからないんです。わたしらのなかまならかくこうと一万云えば一万みんなちがふんです。」……ゴーシュははじめはむしゃくしゃしていました。いつまでもつづけて弾いているうちにふっと何だかこれは鳥の方がほんたうのドレミファにはまってあるかなといふ気がしてきました。どうも弾けば弾くほどくわっこうの方がいいやうな気がするのです。

佐野清彦氏が『音の文化誌 東西比較文化考』で論じている。「まず、猫に対して耳栓をしてゴーシュがチェロをひきまくってみせるところは、聾者ベートーベンを、そして、私が小学生の時、自宅のシロという犬をハーモニカでせつなく吠えさせ、最初のうち面白がっていたのが、いつのまにか自分も本気に吹きまくった経験を思い起こさせます。音は第一に驚きであること。人が、生物が、音の波動を全身で受けとめ、無条件に反応してしまう現象であること。……」「次のかくこうの場面は、……つまり、ヨーロッパ的合理のドレミファ〈楽音世界〉から、かくこうの鳴き声（非常に楽音に近い雑音世界）を分析・判断しようとするのではなく、逆にかくこうの声（雑音世界）からドレミファをみつめ、聴きとる、というふう⁹⁾。」

宮沢賢治のことばに出会った。これだけのことを現す事ができるそのことばのちから。

「一万云えば一万みんなちがふんです」。一万みんな違うことを繰り返して刻む、石や大木に向かい彫ろうとする作家のごとく。

木下順二の「夕鶴」をゼミで上演した時のことを思い出す。保育を学ぶ学生にとって、「鶴の恩返し」の昔話は絵本などで知っている話ではあるが、「夕鶴」のセリフを語っているうちに、始めのうちはただ読んでいたのが、そのうち、だんだん、つうや与ひょうの声になっていく、それは、ことばのちからである。語っている、そのことばが働き（wirken）出す。ことばがその人のなかに住む。ことばを通してつうや与ひょうに出会う経験をしていく姿を見た。

ことばについて、『夕鶴』（木下順二）のつうの台詞が心に残っている。「分らない。あんたのいうことがなんにも分らない。さっきの人たちとおんなじだわ。口の動くのが見えるだけ。声が聞こえるだけ。だけど何をいってるんだか……ああ、あんたは、あんたが、とうとうあんたがあの人たちの言葉を、あたしに分らない世界の言葉を話し出した……ああ、どうしよう。どうしよう。どうしよう。」通常の生活でも、人がことばを使い、ことばで生活し、ことばで理解し、ことばで思考し、ことばで行動する。そしてそのことばが、つうのように互いにそれぞれの聞ける範囲を超えてしまったら、分らないことばになってしまったら。

松居直氏が著書で引用している、旧約聖書エレミヤ書 15 章 16 節「あなたの御言葉が見いだされたとき、わたしはそれを貪り食べました。あなたの御言葉は、わたしのものとなり、わたしの心は喜び躍りました。」このことばを実感する体験を人は日々生きているということ、声の世界、語り、話し、歌う日々の生活でことばを食しているということ。文字を「貪り食べる」こと。実は、声に出して自分の内に刻む。それで「わたしのもの」となる。いつのころからか、絵本の読み聞かせ、本の読み聞かせが、学校で、地域で、多く行われるようになり、人々の関心が高まり、話す教育や朗読教育の必要性が論じられている。この分野での著作にベストセラーも誕生するほどである。然し、読み聞かせについての内容や評価は今日まで一定の方向、視点にとどまっている。

1991年、『声の文化・文字の文化』(“Orality and Literacy” 1982, W-J・オング)が翻訳出版され、声について、ことばについて、語ることにについて関わり、考えてきた者にとって新たな指標が与えられたように思う。それにしても、小泉文夫、武満徹、川田順造、木下順二、佐野清彦等の著作を通してうっすらと見えかかっているものを感じながら、その中心に辿りつくことができない。もどかしい。

3. Sprecherziehung 談話術教育

Staatliche Hochschule für Musik und darstellende Kunst Stuttgart 国立シュツットガルト音楽と表現芸術大学留学中、Sprecherziehungの授業を初めて受講した。Sprecherziehung、普通には発音学と訳されるかもしれない。談話術教育と訳したのは白井光子⁵ではないかと思う。1970年代、彗星のごとく現れたのが白井光子である。ドイツに留学して間もない1974年、当時の東ドイツ、ツヴィッカウで行われたシューマンコンクールでの優勝を皮切りに、その後、ヨーロッパのコンクールを総なめにした。この人のドイツ語はドイツ人の耳にも完璧なドイツ語と評判であった。奇しくもシュツットガルトからワイマールまで“カブト虫”に同乗させてもらい、ワイマールのフランツ・リスト音楽大学で行われた夏期アカデミーに参加した折、初めてその演奏を聴いた。ショックを受けた。ドイツ語も、歌も声も、それまで耳にしたことのない新鮮な演奏であった。

シュツットガルト音楽と表現芸術大学には、通常の音楽各専攻のほかに学校教育音楽、オペラ科、リードクラス、演劇科があった。大学すぐ近くにあったTheaterはオペラ、バレエ、演劇の定期上演を行っていた。一応AクラスのTheater規模であり、特に飛行機事故で急逝したジョン・クランコに率いられたバレエ団は世界的な名声を得、教会音楽の分野でも、ミュンヘンを拠点に活躍していた鬼才カール・リヒター(ドレスデン聖十字架合唱団、ライプツィヒ音楽大学、1981年に急逝)と対照的な

コントロール、Baden Württemberg出身のHelmut Rillingがゲッヒンガーカントライを率いて初来日している。今振り返るとシュツットガルトの時代を迎えたときであった。それから数年してRillingがStuttgartで始めたBachakademieは今日まで継続し、南米、北米他、世界各地でAkademieが開催されている。RillingはGedächtniskircheのカントールを定年まで務め、2013年、Bach Akademieの総監督職も後継者に引き継いだ。1975年当時のStuttgartにはその後の活動を予兆するような生き生きとした空気があった。

ドイツの音大独特のLiedklasseを指導していたのは、Konrad Richter教授であったが、SprecherziehungのUta Kutter教授がともに担当してもいた。Sprecherziehungは、詩と向かい学ぶ、学び方を学ぶ講座である。授業は歌手とピアニストの組み合わせで行われる。各々が歌のテキスト、大抵の場合は詩を持ってくる。その詩を朗読する。慣れない受講者にはなかなか難儀な時間であった。

受講生は一人ひとり、始めに、全体を通して朗読する。朗読後、教師から質問が投げかけられる。初めのうちは、外国人として、Aussprache(発音)、Artikulation、Intonationを正確に理解し、正しくという目標らしきものをイメージとして持っていたと思う。然し、要求されているのは、詩を読むこと、ひとりの読み手として詩を読むことである。正確に、美しく、立派には要求されない。ひとりの読み手が詩を詠む。読み手として。その意味がわからない。それでも、ドイツ語の詩を何度も何度も頭で繰り返し、声で繰り返し、教師から投げかけられる問いや課題に集中し、応答を繰り返す。繰り返す事、つまり、内側に刻む、あるいは掘り起こすことが繰り返される。今頃解ってきたことは、ドイツ語との格闘に苦しんだのではなく、相手はことばであったということ。ことばを理解せず、ことばと向き合ってもいなかったということか。他の仲間はどうかであるかわからない。

Lied を学ぶときは、歌として学ぶ。ドイツ語の発音を調べたり、作品の解釈に必要な情報、詩人の他の作品を開くこともある。それでも、歌い手には歌詞の詩であった。音はことばに従属すると思っけていても、歌うことに気を取られている。作品を理解し、解釈し歌っていくわけだが、大抵の歌い手は自分に忙しい。それでも詩と音楽を並行して学ぶことがごく稀にあった。歌から音楽や詩の世界が開かれていく幸せなときであった。

歌の詞（ことば）からテキストに導かれる。作品からではなく、歌の詞が作品へと道を示し、ミニヨン、ガニューメート、ズライカ、グレートウヒェンがゲーテへ導き、Amalia, Götter in Griechenland からシラーに辿りついた。詩は、歌う者を飛翔させる、Ganymed を歌えば Ganymed とともに天に昇る。ミニヨンなどは、ベートーヴェン、シューベルト、シューマン、リスト、チャイコフスキー、ヴォルフの作品で何人ものミニヨンを想い、憧れた。「旅人の夜の歌」の詞は、夕べの深い眠りについた森の梢に鳥も静まり、待てよ、やがてお前も憩うのだ、と歌う。ぐっ、と心に響く。歌を通して作品に出会う。作品の向こうに詩人と作曲家がいる。

4. “うたう”

記憶をたどると「歌」を意識したのは3～4歳のころであった。そのときから、うたは常にメロディーとことばであった。メロディーには調べの調子があり、拍子があった。その拍子は動きとことばから生まれたようだ。ことばにもストーリーがあり意味があった。うたにはころがあった。

日本語の歌について今あらためて考えてみると、ああそうだと、気づくようなことがある。例えば、名曲はその歌詞が見事で、情緒的な表情に流されない。短い歌の中に深い意味と感情をこめてうたうが、崩れることをゆるさない型がある。歌のことば、歌詞を通して言葉に出会い、テキストに出会う。「緑の丘の赤い屋根、とんがり帽子の時計台、鐘になりますキンコン

カン、メエメエ子ヤギもないてます。」現実には何も存在しない、赤い屋根の家もなければ、時計台など見たこともない、それなのに、頭の中に想像してきている世界が生まれて、鐘さえ聞えてくるようだ。詩に関心がなかった。日本語の詩は歌になると流れる。文字では音が聞こえない。文字に音が見えないからだろうか。

4.1 大正デモクラシー、赤い鳥運動、唄、童謡

子どもの頃にさんざうたったうた、今、あの歌の一つひとつを歌って見る。必ずしも納得がいけない、なぜこうなの？本物の作品はやはり、賜物、あたえられたものである。それは人間の才ではなく、才能こそが賜物である。好きな歌、好きな歌い手について考えてみる。何故好きなのか、声の色、呼吸の間、音程やリズムのとりかたのちょっとした特徴だが、それは、計算してできることではない、ひとり一人の歌の所作、これもまた賜物である。

4.2 響き

響きを知りはじめたときが、音楽がわかりはじめたときと思う。

大学院生の頃、先輩や友人が歌うモーツァルトの『魔笛』やビゼーの「カルメン」のアンサンブルを聴いて声の協演の何とも言えない美しさというか、生き生きしさ、音が生きているということがわかった。音がものを言うことがわかった。その音楽からモーツァルトやビゼーが語りかけてくる。ことばが動く、語る、その凄さ、ちからを知った。

響きは耳を身体を包みこむ。人は身体全体で聴く、音楽で音楽を、音楽の響きの、自然のうちにある変わることのない原則、賜物、それが完全協和で生まれる響きを体験したとき、音楽との出会いのときである。平均律の楽器の伴奏では生まれぬ響き、その響きを耳にしたとき、人が音楽と出合うときである。

合唱で多くのことを学ぶことができるし、育まれる。小中学校、高校での学内合唱コンクー

ルの影響がすさまじい。吹奏楽などの部活での経験を除いて、学校での唯一の音楽体験が合唱コンクールで、歌われる曲目も大体似通っていて、経験も同様で似たり寄ったり共通の経験になっている。日本の学校音楽文化と言えるまでに定着している。

この合唱経験は果たして音楽的経験だろうかと思うことがある。彼らの経験する感動や出会い、音楽そのものか、仲間のものか。勿論、音楽を共にすることを通しての経験であることは間違いなく、音楽的な経験でもある。であるけれど、音楽を耳にしただろうか。今の音楽体験は自分もともに歌う体験であるが、日常楽しんで、ウォークマンで聴いているミュージックと同じでそのサウンドは大気を通して耳に聞こえてくる音の世界ではなく、共鳴なく直接飛び込んでくる騒音音楽である。音は聞く対象ではなく、音を生み出すエネルギーの発散が音楽である。

面白さより、声が合うことの難しさに悩まされた。でも、指揮を始めたとき、人の声が合わさることによって生まれる響きの暖かさ、柔らかさ、何よりも響きが生きていることを知る。その響きは歌って初めて出会い、出合って感得する、体験学習。誰もいなくても出合うことはある。指揮者として懸命に振っていたとき、突然、耳に各パートの声が聞こえてきた。各パートが生きて語り始めた、勝手に語り始めた。指揮の仕事は歌う人々がうたいたいくなるよう道を整える。

合唱の立ち位置であるが、時に円形に並び、左右のスピーカーから高音と低音がバランスよく聞こえるといういつもの型ではなく、すべてのパートをスクランブル状態にして歌うとき生まれる声の饗宴を、人々が歌いつつ体験したら、音楽は生きていること、音楽が生まれるということを知り、自らも音楽を生き生きと楽しみ、音楽するであろう。

・結びに

表現は「する」ことというより「表に現れ

出る」のである。「音楽」も音を楽しむのである。歌はうたう。

今後のテーマは、「ことば」に出会って以来の、「日本語と音」、「日本人と音楽」であろうか。小泉文夫と谷川俊太郎の対談からの引用で本稿を閉じる¹⁰。

小泉 谷川さんは、近年「わらべうた」なんかをつくってるときに、相当に明治維新への恨みつらみを痛感されておられるようすが。……芸術と世俗芸術の断絶みたいなことに対して。

谷川 ぼくはその点に関しては、恨みつらみ言ってもしょうがないとは思っています。明治維新の日本の選択というのはわりと二者択一的なところがあったという風にぱく然と考えているんです。だから日本人の民族性が違ってりやももちろん違った受け入れ方があったんだろうけれども、あそこでわれわれが我々の文化の持続性をどうにか残そうと思ったら、もしかすると植民地になってたかもしれないみたいな感じがあるものだから、そういう意味で誰かを恨むとかいう気持ちはないけれども、実際に明治の始まりの時点で非常に日本語そのものが深く傷つけられたという意識がとても強いわけです。この傷跡はそう簡単に、例えば百年ぐらいで回復するようなものではないということもだんだんわかってきちゃうわけです。また、そういうふうな認識がわりあい日本人の中に少ないということを痛感している。(以下省略)

小泉 日本語が傷つけられちゃったというのは、音楽とちょっと共通したところがあって、非常におもしろいんだけど、具体的に言うとうどういう点なんですか。

谷川 それは、実は明治維新よりもっと前に、つまり漢字が輸入されたということがすでに日本語を相当決定しているわけですね。(一部省略) 西洋のわりと抽象的な概念がそのまま、漢字というものをわれわれが持って

いたがゆえに、比較のお手軽に移植できてしまったということですよね。(一部省略)

どんな抽象的な概念も、ほんとに日常のお皿とかコップとかとおなじようにもところが日本の西洋から移植された概念というのは具体的などっかかりがないということですかね。(省略)日本の現代詩というのとはとにかく声というものがないんですね。詩の声が。(省略)もうちょっと自作朗読みたいなことをやって、日本語の聴覚的な側面を回復できないかというようなことを考えてやるわけです。

全文を転載できないが、以下に、話題として重要な項目が続く。

1. 非常に視覚的になっている日本語の文脈
2. 創作童謡をめぐって
3. 短調の二・六抜き音階の流行
4. 音楽教育は何のために
5. 日本語と日本人の感性

対談で話題になっている日本語の問題と自分なりに取り組むことがこれからの課題である。「詩の声の不在」、そして「創作童謡をめぐって」では「赤い鳥」以来の童謡について、「短調の二・六抜き音階の流行」も面白い。どれも、できるだけ時間をかけ、ゆっくり理解し考えたい項目である。「そういうふうな認識がわりあい日本人の中に少ないということを痛感している」、このことが、保育・教育の話題、課題として目に留まる日の来ることを期待して。

日本語と英語のバイリンガルで育った人へのインタビューで、同じような質問に対して、日本語での応答と英語での応答にまるで別人のような考え方の違いが見られたという話を聞いた。それが、たまたま起きたことではなく、普通に起こりうることとすれば、ことばを超えて理解する人間の力の凄さとともにその限界も考えてしまう。確かに、翻訳で完璧に伝わらないニュアンスや実際の思っていると、本来翻訳になったら、原著者の意図に関わらず、そこには微妙に

新しい作品なり新しい表現が誕生しているということである。

日本語の問題、リズムや音楽についても、音楽家や教育に関わる者は、一人ひとりの見解を持っていると思う。日本ほど、毎年多くの子どもの歌が生まれ、歌われるところはないという。子どもの歌に限らず、歌番組を見ても最近の傾向は、歌らしい歌は時を経てなお歌い継がれる歌を聴き、今売れ筋の話題の歌は確かに人々がことばを合わせて叫んでいるが、歌わない、歌えないうたがほとんどである。歌手?ののりの悪さ、歌の下手さは歌らしい歌がないことにもよる。

らっぶのような歌詞になるのは基本的に音節に長短のない日本語にはびったりなのか、どこできろうと影響の少ない日本語の特性であろうか。日本のことばは日本語独特のニュアンスを持っている筈である。日本国中、同じ情報に教育され、馴らされ、いつのまにか日常生活が、ことばが変容していることに皆気づきながらも押し流されているのか、あるいはそれを承知して新しい可能性を見通しているのか。

乗り物の中で聞こえてくる主婦、学生、大人の男たちの会話。ほほえましいのはわずかだ。意味のない、気楽で退屈な話しをして、それが庶民の会話であろうか?生活の、暮らしの会話であろうか。

日本語は後拍に重みのある、爽やか、ゆったり、どっしりした気風、品格を持ったことばである。明治期に新しい音調の世界に開かれ、急速、学校教育のために学び作った唱歌の数々を歌ってみると、確かに、退屈、のっぺらな作品もあるが、雅楽調で悪評判のものにしても、それなりの品格が感ぜられる。大事にすべき日本語らしさもあるのではないかと考えている。

註

¹ アルトゥーロ・トスカニーニ (Arturo Toscanini, 1867年3月25日 - 1957年1月16日)、イタリア出身の指揮者

- ² 中山弘一郎 編・訳、『コダーイ・ゾルターンの教育思想と実践 生きた音楽の共有をめざして』(全音楽譜出版社、1980年) pi
コダーイ (Kodály Zoltán 1882-1967、言語学者、哲学者)、キシユ・アロン (1845～1908年、教師、民俗学者)
- ³ 三村真弓、吉富攻修、北野幸子、『ハンガリーにおける保幼小連携音楽カリキュラム・就学前教育から小学校一年生への系統性に着目して』広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学紀要 xx2008
- ⁴ 前掲書 p5-6『ハンガリー民謡大観』第一巻「遊戯うた」序文、1951年
- ⁵ マジャールじん【マジャール人 Magyarok】ハンガリー人の自称。フィン・ウゴル語派のウゴル語系に属するマジャール語を話す。フィン・ウゴル語派の原住地は、現在のところ、ウラル山脈中・南部付近とされている。前3～前1世紀にフィン語系とウゴル語系の民族は北と南に分かれ、それぞれ西進するが、マジャール人はバシキール(バシコルトスタン)あたりで独自の人種的言語形成を行った。7～8世紀ころにドン川中流へ移り、ここでブルガール、トルコ系諸族の文化的影響を受けた。(世界大百科事典) マジャール・じん【マジャール人】ハンガリー人の自称。原住地はウラル山脈中・南部とされる。九世紀末南ロシアから現在の地に移住。(大辞林 第三版、三省堂)、前掲書 p58
- ⁶ 前掲書 p30
- ⁷ W-J・オング 桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳、『声の文化と文字の文化』(藤原書店、1991年) p157
- ⁸ 松居直、『絵本・ことばのよろこび』(日本基督教団出版局 1995年) p24
- ⁹ 佐野清彦、『音の文化誌 東西比較文化考』(雄山閣、1992年) p114-115
- ¹⁰ 小泉文夫、『音楽の根源にあるもの』(平凡社ライブラリー、1994年) p287 小泉文夫、谷川俊太郎 音楽・言葉・共同体 三つの対話 (1977 青土社 刊行)
- W-J・オング 桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳、『声の文化と文字の文化』(藤原書店、1991年)
佐野清彦、『音の文化誌 東西比較文化考』(雄山閣、1992年)
小泉文夫、『音楽の根源にあるもの』(平凡社ライブラリー、1994年) 小泉文夫、谷川俊太郎 音楽・言葉・共同体
松居直、『絵本・ことばのよろこび』(日本基督教団出版局 1995年)
木下順二 『夕鶴・彦市ばなし』(新潮文庫 1954年)

引用・参考文献

- 中山弘一郎 編・訳、『コダーイ・ゾルターンの教育思想と実践 生きた音楽の共有をめざして』(全音楽譜出版社、1980年)
武満徹 川田順造、『音・ことば・人間』(岩波書店、1980年)